

研修成果報告書 ～山形県天童市～

はじめに

私たちは近年世界的に問題視されている食糧危機について焦点を当て、現状を打破する鍵となるサステナブルフード（昆虫食）の探求・開発に取り組んだ。持続可能な開発目標として定められた SDGs の中でも環境資源を大切にすることは最も重要な目標の一つとしてあげられている中で、日本では首都の一極化が進みほぼ全ての物流がお金で解決するシステムになっている。近い未来に来ると予測されている関東区域を襲う首都直下型の地震が来た場合、普段最も多くの人や物が集まる東京都では、最も食料が調達されない地帯へと瞬く間に姿を変えることも想定される。今こそ環境に優しく持続可能な食材に注目し、食糧危機問題解決に向けて動き出す必要があると考える。

概要

今回訪問させて頂いたのは山形県で最も大きい社会福祉法人の山形県コロニー協会である。広大な敷地と施設を持ち合わせる山形県コロニー協会では、就労継続支援 A 型・就労継続支援 B 型のみならず、障がいのある方やそのご家族が気軽に相談できる相談窓口など、その他にも数多の施設を構え、全ての人が健康で安全な生活ができるよう幅広く取り組みを進められている。地球環境に優しい自社製品を製作・販売することで独自のスタイルを築かれてきたことも、幅広い取り組みの基盤を作り上げたきっかけの一つとして挙げられる。その山形県コロニー協会さんが今回、新たにサステナブルフード（昆虫食）にフォーカスした事業に力を注ぎたいということで、私たちは事前に東京都内でコオロギを中心とした昆虫食の商品開発を手掛けられている企業/工場に訪問と見学を繰り返しさせて頂き、まずはインプットの作業に尽力した。そこで昆虫食を販売するまでの食材の輸入/生産/販売を通した一連のサプライチェーンを辿ることで、自分たちのオリジナルを含むアウトプットをする形で山形県コロニー協会さんに訪問させて頂いた。

持ち込み企画概要

1. フルーツグラノーラ/プロテインバー

多くの果物の収穫量で国内上位を誇る山形県では、廃棄される果物によるフードロス問題も問題視されている。地元農家さんとの連携を図り、規格外品として出荷されない果物をドライフルーツ化した上で、それを昆虫食と組み合わせたフルーツグラノーラやプロテインバー商品の開発を提案した。果物を乾燥させることで賞味期限を伸ばす狙いと、豊富なタンパク源で、栄養素的にも体に優しいコオロギを生かすことにも特化させることにも狙いを持って取り組んだ。

2. 将棋×昆虫食

2 点目は天童市の特産品である将棋のコマをモチーフにした昆虫食の試作である。コオロ

ギを直接手に取るよりも将棋が絡むことでお土産的付加価値が付き、地域の宣伝にもつながる可能性があると考えた。

山形県コロニー協会訪問記/施設見学

事前に東京都内で訪問していた昆虫食を手掛ける企業が商品のパッキング作業を委託していた福祉作業所に比べ、山形県コロニー協会は施設も大きく数も多いことでその利用者は数十種類もの職業体験をして自分に合った場所や仕事を見つけながら働くことができていた。しかし、このように自立心を養い社会人としての評価を受けることができる一方で、収益を産むことが難しい金食い施設であることも問題点として挙げられていた。

山形コロニー就労サポートセンターでは一般企業への就職を希望している障害者の方を対象とした、働くための知識などを通して本人に応じた形で基本的な生活訓練を行う。幅広い仕事内容と毎日異なる内容の作業を、利用者さんがそれぞれの適正に合わせて自信を持って取り組まれていた様子が印象的だった。それらの事業展開に合わせて職業リハビリテーションを行い、一般企業への就職に向けて準備されているようだ。

山形コロニーシードでは学校通学中の障害児に対して放課後や長期の休みに生活能力向上のための訓練機会を提供している。ここで最も特徴的と言えるのは「早期職業準備トレーニング」だと感じた。高校生段階ではすでに自己の形成が完成に近づいているため、そこから生活訓練や就職における基礎知識を身につけるためのリセット的作業を行うのは困難を極める場合が多いとのことだった。そんな中で山形コロニーシードでは早い段階で就職準備に向けた育成を進められることで利用者の自立を促進させていたのだ。あいさつなど、まずは幼稚園で習ったレベルの基本的なことから行っている。

また山形コロニーセンターはベーカリー・プロダクト・リサイクル・ファームの四つの部門からなる。コロニーベーカリーさんで販売されていたパンを実際に購入して食べさせて頂いたところ、天然酵母の柔らかい味を存分に感じることができたが、実際賞味期限が短いパンを毎日裁き切るとは難しく広報活動など、新しい視点でパンの周知を進めていくことも検討が必要とのことだった。

事業展開

上記のような幅広いサービスを提供する山形県コロニー協会さんでは、手掛ける事業も幅広い。メインの収入源となっているのは就労継続支援 A 型の印刷事業である。一企業として収入を上げていくためには厳しさも伴うが、その中で競争原理の労働市場で勝負することから得られる自信は、社会に貢献しているという自己肯定感向上に直接的なつながりを見せる。障害があっても労働者として仕事と向き合うことは、自立した社会人として評価を受けることを可能とし、働きがいへと繋がっていた。山形コロニーでは、このシステムが作られていたのである。しかしもともとは福祉工場とその寮で編成され、障害を抱える人も同じ立場で働く体制を作り、就労継続支援 A 型の前進とも言えた山形コロニーさん

も、今日では利用者と支援者の関係へと変わってきたことに進化しているのか退化しているのか、疑問を抱えているとお話しされていた場面は印象的だった。

私が興味深いと感じたのは、印刷後に余った紙から作る紙ビーズというものである。これは余った紙が細長くカットされたものを丸めてノリで貼り、上からマニキュア等を用いて塗装を施すことで完成する。これをブレスレットなどにして販売することで資源を余すことなく利用する山形コロニー独自の製品を制作されていた。幅広い就労支援から展開される独自の事業は、廃棄物を再利用したり山形の自然を活かした天然酵母のパンであったり、いずれも持続可能な社会に貢献する環境に優しいものだと感じた。社会福祉施設としてではなく一社会企業として地域で独立した存在を目指すことで、障がいのある人が社会の一員として地域での自立した生活を保障するシステムを作ることができているのだと感じた。

考察・まとめ

山形県コロニー協会が進められている取り組みは、どれも持続可能な環境に優しいものであることに加えて斬新であった。自社の製品を生産されているものも多いが、ビジネス的な思考で考察していくとやはり何を作るかにプラスしてどこで売するのか、どのようにしてどのターゲットに販売するのか、といった点もかなり重要になると考えた。そこで、今回は山形県コロニー協会に少しでも訪問する機会が多くの人にとって増えるために、地元のさくらんぼ農家さんと連携して、廃棄するはずだった果実をさくらんぼ狩りに来ていたお客さんに収穫して山形県コロニー協会さんへ持ってきてもらうことでコロニーベーカリーにて販売されているパンとそのさくらんぼから作られたジャムも一緒に味わうことができるような仕組みの提案などを中心に行った。利用者さんの負担が大きくなってしまったり続けることが難しくなってしまうため、初めから収益化することは難しくても地元農家さんとのタイアップを図り、観光客も巻き込みながら体験型の取り組みを進めることで、各組織のイメージアップにもつながるのではないかと考えた。

以上